

広報おうら

平成 22 年 3 月号 No.522
毎月 1 日発行

From editors

ひとりごと

▼4月に小学校に入学する娘が、おたふく風邪になってしまいました。だれもが通る道とはいえ、高熱が続き、両ほほが痛くてご飯も食べられなくて大変。発症から1週間ようやく回復しました。▼そういえば昨年6月には水ぼうそうにもかかりました。おたふく風邪や水ぼうそうは、幼いうちにかかったほうが軽症で済むそうなので、これでよかったのかな。▼3年間通った幼稚園も今月で卒園。来月からはランドセルを背負って小学校に通うわが娘。よくぞここまで育てくれたと、感慨もひとしおです。親バカですが…。(田)

まちの風景



朝陽を浴びる川の夕景

Photo 原田隆雄(記録ボランティア)

邑楽町携帯サイト

2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。



携帯用URL
<http://www.town.ora.gunma.jp/k>

編集・発行
邑楽町役場企画課
〒 370-0692 (住所記入不要)
☎ 0276-88-5511 (代表)
☎ 0276-47-5007 (企画課直通)
☎ 0276-89-0136
URL <http://www.town.ora.gunma.jp>
E-mail koho@town.ora.gunma.jp

あしもとに故郷

連載
第二百三十八回

ふる里の歳時記

(111)

写真と文 厚川小一 (エッセイスト)



木道の幼児車春を曳き出せり 厚川小一

春が来た

はるといふことは春がきてをりぬ 平井照敏

「春が来た」と文字を書いてみただけで、背中のあたりがぬくぬくしてくる。春の語源は草木の芽が「張る」気候の「晴る」田畑を「墾る」などの諸説がある。南の国から草木の花を連れてきてくれる「佐保姫」は、春をつかさどる女神として神話から民話へと伝え継がれたといわれ、秋をつかさどる「竜田姫」と対をなす。日本の民話は幼児のころから、私たちを遠い夢の国へ導いてくれたのである。昔ものがたりも花咲じいさんから習った。

小学国語読本もハナ、ハト、マメ、マスから始まりトツプはハナで、その後、手の平を返すように、ススメ、ススメ、ヘイタイススメに替えられた。ミリタリズムの芽を育てる第一歩は幼児からと、軍の圧力が文部省に冠されてきたことを、私たちは知る由もなく育て上げられたのである。神国日本から軍国日本への道のりは、そう遠くはなかった。

三月といえは立春から一か月以上過ぎていくが寒い朝が時にある。「春浅し」「芽え返る」「余寒」などの季語がそれに当たり、私など朝夕は無理しても歩くが、昼はひっそりと日向をうまく利用して家にももっている。観音参りも二年ほど前から止めた。—— やつ、まだ長生きするつもりか—— そんな、ささやきが耳に入る

つたからである。

春浅し人生ことりと動き初め 榎本 達

私は三月一日、三月十日、三月二十日の三回、重い腰を上げてサクラのつぼみを写しに出るが、今では自宅庭のソメイヨシノで間に合う。念のため町内のサクラを見に出るのは遊びであり、日本サクラの会の旧友にネガを送るためである。今年から気象庁では、サクラの開花予報を発表しないようである。その理由は民間情報機関の進展にあり、すでに一月二十五日のインターネット上にきれいな映像が出ていた。その中、テレビの気象情報から平井さんの顔が消えるかもしれない。

サクラといえは何を眺めても花見、それが庶民の唯一の行業となったのは、元禄年間(一六八八—一七〇四)のころからであるといわれ、近年は三月に入ると、南から順次気象関係機関から伝えられ、遠く出掛けるかたもおられる。また、サクラの植樹も多くなってきた。秋妻の光林寺では、寺前に檀家の皆さんがサクラ苗、さらにその前に牡丹を植えられた。二十年近く先の夢であるが本数も多いので、サクラ山が出現するのは例え小公園でも、この案が素晴らしい。

かつて、谷田川の上流である赤堀地区の堤防

が完成した時、サクラの植樹案が地元から挙がったが、旧建設省からそれはならぬと一蹴されてしまった。谷田川をずっと下って渡良瀬遊水池までサクラ並木が続いたなら、それは見事であろうという案であった。しかし、もともとサクラ並木のあった地区には、条件つきで再植樹が許可されたようである。今なお残る板倉地内の古利根(丸山地区)、それに対岸の北川辺町では、もう花が見られるようになってきた。谷田川は一級河川であり、その後の管理が問題のようである。

ヘリコプターによる農薬の空中散布が県条例で禁止され、アメリカシロヒトリや天狗巢病の駆除も、すでにその筆頭に挙がっていた。わが町の木として残る赤松もまた同じ運命であり、林に一步踏み入ると、さながら松の墓のようである。マツクイ虫の寄生で、枯れて伐られた丸太にビニールが被せられているのを毎日見て通るが、何ともやるせない。その赤松林の中、冬、一部に当たるが殺虫用のクサビが打ち込まれた。この薬品が根本から枝先に達し、マツクイ虫の発生を抑えられると、施行していた業者から伺った。昨年十月末、この松林で二羽のホトトギスに出会った。実に七十余年振りであり、カッコウとの違いもはっきり目にした。鳴き声の特許許可局は「トキッキヨ」と聞こえた。今秋もまた出会いたい。